

カリタス女子中学校 第二回入学試験

二〇二〇年二月一日（午後）実施

# 国語問題

（五〇分）

\* 答えはすべて解答用紙に記入すること。

\* 字数の指定がある場合は、句読点や記号をふくむこととします。

文章を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

多くの日本人が日本の良さだと感じるものの一つとして、「思いやり」や「気配り」の道徳がある。言葉に出されなくても、他者の気持ちや思いを細やかに察し、他者の観点から自分自身を見つめ、他者に配慮するものだ。

「思いやり」「気配り」の発達と日本語の特性には、密接な関係がある。日本語が生み出すものの方や日本語会話で求められる習慣は、「思いやり」や「気配り」の文化の①源泉である。

精神医学者の木村敏氏や言語学者の鈴木孝夫氏などが指摘してきたことだが、日本語と英語などのヨーロッパ言語では、話し手は、異なった自己認識を迫られる。

日本語には自分自身を指す語は、「私、俺、僕、自分、わし、手前、小生」などたくさんある。①  
 なた、君、お前」など数多い。

これ以外にも、相手や自分を、職場や親族のなかでの「役割」で指し示す場合が少なくない。

二人称として相手を指す場面で、「先生」「課長」などの役職を用いたり、「お母さん」「おじいちゃん」などの親族名称を使用したりするのは日常的である。たとえば、先生を前にして生徒が、「先生は昨日、こうおっしゃいましたね」と言うのは普通であるが、英語のように二人称代名詞を用いて「あなたは昨日……」というのは稀である。

A 自分自身、つまり一人称にさえ役割名称や親族名称を用いることも珍しくない。たとえば、小さな子を持つ男性が子供の前では自分のことを「お父さんはな」、あるいは小学校の教師が児童の前で「先生はね」などと言う場合だ。

B このように、日本語では、会話のなかで自分や相手を指す言い方が多岐にわたっており、状況に応じて、うまく使い分けなければならない。

他方、英語などヨーロッパの言語は、自分や相手を指す語はとてカギられている。ヨーロッパ言語では、自分や相手を指す言葉は、せいぜいそれぞれ一語か二語くらいしかない。

英語の一人称は、どんな場合でも常に I だ。これは、英語の世界観では、常に自分が出発点、あるいは基準として、そこから周囲を認識するというものの方になることを示している。C 自分がまず揺るぎなく世界の中心に存在していて、そこから他者や周りの状況を

を規定していくというわけだ。

木村敏氏の言葉を借りれば「一人称代名詞が例えばアイの一語だけであるということは、自分というものが、いついかなる事情においても、不変の一者としての自我でありつづけるということを意味している」。つまり、自我は、状況や他者との関係の認識に先んじて、それとは独立に規定されることが表現されている。

日本語の世界観は異なる。日本語では、状況に応じて適宜、自分を指す言葉を柔軟に使い分けなければならない。自分の周りの状況を先によく知り、その後、そこでの自分が認識されるという順番となる。

木村氏は次のように述べている。「日本語においては、そして日本的なものの見方、考え方においては、自分が誰であるのか、相手が誰であるのかは、自分と相手との間の人間的関係の側から決定されてくる。(……中略……)自分が現在の自分であるということは、けつして自分自身の『内部』において決定されるのではなく、つねに自分自身の『外部』において、つまり人と人、自分と相手の『間』において決定される」

日本語の世界では、自己は、常に状況や他者との関係との関わりで規定され、認識されるのだ。

このような日本語の特性は、文化のさまざまな側面に影響を及ぼしている。たとえば、日本と、英語を母語とする国とでは、それぞれ異なる道徳の見方が発達する。

日本では、「思いやり」「気配り」「譲り合い」といった価値が強調される傾向が生じる。状況認識や他者との関係性の認識が先で、それに応じて臨機応変に自分を規定していくという柔軟な日本人の自己認識のあり方は、「思いやり」「気配り」「譲り合い」の精神を育みやすい。

自身の主張や欲求を、状況や他者の観点に③テラして、お互いにより望ましい形に事前に調整し合う。そして各人には、場の複雑な状況や他者の観点を鋭敏に読み取るための「共感能力」(「思いやり」の能力)や「感受性」(優しさ)、また自分を客観的に見つめ、必要であれば自分のこれまでの認識や考え方、行為を柔軟に修正していくための「反省」の能力が求められる。そういうものが日本人の道徳観となりやすいのだ。

他方、英語を母語とする人々であれば、自己は最初から中心に位置するので、複数の人々の自己主張は前もって調整されず、衝突し合

うことが前提とされやすい。そこで、英語圏だと、互いの自己主張のぶつかり合いを事後的に調整する「公正さ」という理念や、それを体現する法律やルールの明記や順守（最近の言葉で言えば「コンプライアンス」）が強調される傾向がある。

戦後を代表する経営者、出光佐三氏（出光興産の創業者）は、日本の道徳の特性を「互譲互助」と称した。文字通り、「互いに譲り合い、助け合う」という意味である。日本語は、「互譲互助」タイプの道徳を求め、育成する言語という側面がある。

「思いやり」や「優しさ」を大切にし、他者の気持ちを感受する能力や反省能力の発揮を通じた調整を重んじる日本語の世界と、「公正さ」という理念を掲げ、「法」「ルール」による事後的調整を重んじる英語圏のあり方。どちらの道徳の見方が優れているというものではなく文化的相違の問題だが、多くの日本人にとっては、慣れ親しんだ日本の見方のほうが好ましく感じられるのではないだろうか。

鈴木孝夫氏は、日本語の持つ「タタミゼ効果」について最近、よく書いている。

「タタミゼ (tatamiser)」とは、もともとは、フランス語で使われはじめた比較的新しい言葉で（フランス人が）「日本かぶれる、日本びいきになる」「日本人っぽくなる」といった意味である。フランスでは柔道がさかんなこともあり、「畳」が日本のシンボルとなっているのであろう。

鈴木氏は、この言葉の意味を少し変えて、日本語が、日本語使用者に与える影響について語っている。

海外の日本語研究者や日本語教師、**2** 日本語学習者の間では以前から、「日本語を学ぶと、性格が穏和になる」「人との接し方が柔らかなる」ということが指摘されていたようだ。日本語の持つこうした「人を優しくする力」に着目して、鈴木氏は「タタミゼ効果」と名付けた。「日本語、日本文化というのは悪く言えば人間を軟弱にする、よく言えば喧嘩とか対立、対決とかができにくい平和的な人間にしてしまいがち」だというのだ。

鈴木氏は多くの実例を紹介している。**3** アメリカ人のあるキャリアウーマンは、日本語を学び、日本で暮らした結果、万事控えるめになり、自己主張があまりできなくなってしまった。ロシア人の元外交官は、日本語を学び、日本に滞在している間に、ロシアに帰国すると「日本人になったみたいだ」と冗談を言われるぐらい印象が変わり、やはり人当たりが柔らかくなったという。

このように多くの日本語学習者が、日本語を学ぶと、「柔和になった」「一方的な自己主張を控えるようになった」「相手を立て、人の話をよく聞くようになった」「自分の非を認め、謝ることができるようになった」などの性格の変容を経験しているようだ。

鈴木氏の「タタミゼ」の話は、まんざら大きな話ではないだろう。日本語の使い手は、前述の自分や他者を指す言葉の使い分けにしても、待遇（敬語）表現にしても、常に状況や他者との関係性を先に読み取り、そののちに自己を柔軟に規定していくことを要求される。また、日本語の会話では、話し相手の気持ちを察する「察し用法」も数多く用いられている。

〈中略〉

日本語では、日常的な会話の場面でも、たとえば、ある人のお宅を訪問してそこを辞去する際、帰るとあまりはつきり言わない。「あのう、それではそろそろ……」「そうですか。お構いもしませんで……」「いえいえ、ではまた」「お気をつけて」というような会話が交わされることが多い。

互いに、周囲の状況や相手の気持ちを察する能力を鍛えて身につけていないと、このような日本語の会話はなかなかよどみなく進んでいかない。

日本語教育の研究者である佐々木瑞枝氏は、日本語の会話のこうした特徴をとらえて、日本文化には「察しの文化」の側面があると述べている。

日本語を学ぶ際には、状況や他者の気持ちを読み取る「察する力」「共感」「思いやり」などの能力を発達させ、身につけることが強く求められるのだ。日本語学習者に「タタミゼ」効果が生じるのは当然と言えば当然かもしれない。

〈施光恒『英語化は愚民化 日本が地に落ちる』（集英社新書）より〉

〔語注〕

- ※ 二人称……………自分が話している相手を指す表現。本文にある「あなた」、「君」、「お前」などのこと。
- ※ 多岐にわたって……………多くの様々な方面におよんでいること。
- ※ アイ……………英語の一人称であるIをカタカナで表記したもの。
- ※ 適宜……………その時々に応じて、適切な行動をとること。
- ※ 鋭敏に……………物事を鋭く感じとること。

※ 順守……………規則や決まりに従い、それを守ること。

※ 非……………誤りや不正、まちがっていること。

※ 辞去する……………別れのあいさつをして立ち去ること。

問一

① 源泉

② カギられて

③ テらして

の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。

問二

1

く

3

にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア たとえば

イ ところが

ウ また

エ あるいは

問三

A 自分自身、つまり一人称にさえ役割名称や親族名称を用いるとありますが、次のア～オの例の中で一人称に「親族名称」を用いているものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア 母親がケンカしている姉妹の姉に「お姉ちゃんなのだから、妹におもちゃをゆずりなさい。」としかつた。

イ 祖父が孫に「今日の帰りは、おじいちゃんが保育園にむかえに行くからね。」と約束した。

ウ 先生が児童に「帰り道に知らないおじさんに声をかけられても、答えてはいけませんよ。」と注意した。

エ 友達が先生に「昨日バスの中で立っていたおばあさんに座席をゆずりました。」と報告した。

オ 兄が弟に「困ったことがあったら、お兄ちゃんに何でも相談するんだぞ。」とほげました。

問四

B このように が指し示す部分の最初と最後の五字をぬき出して書きなさい。

問五 C 自分がまず揺るぎなく世界の中心に存在しているとありますが、これとほぼ同じ内容で、別の言い方をしている四十字程度の部分を本文中からぬき出し、その最初と最後の七字を書きなさい。

問六 D 日本と、英語を母語とする国とでは、それぞれ異なる道徳の見方が発達する とありますが、その二つの見方に対しての筆者の考え方を説明したのもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 英語圏の道徳のあり方よりも、日本語の世界の道徳のあり方が優れている。

イ 戦前の日本にあった「互譲互助」タイプの道徳が現代の英語圏にも求められている。

ウ 日本語の世界にも、英語圏のように自己を最初から中心に置く必要がある。

エ 日本人は、英語圏の道徳よりも日本の道徳の見方の方を好ましく感じている。

オ 英語圏の道徳と日本の道徳のちがいを文化的相違の問題とするのは適切ではない。

問七 E 日本語の持つ「タタミゼ効果」とありますが、これについて次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) 日本語の持つ「タタミゼ効果」とは、どのようなものですか。三十字以内で書きなさい。

(2) なぜ日本語を学ぶと「タタミゼ効果」が生じるのですか。本文中の言葉を用いて説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

六年生になった始業式の日、玲実が転校してきた。私のすぐ後ろの席だった。

私はその日、文乃とクラスがわかれてがっかりしていた。A 王国にこもっていた私には、文乃の他に友だちがいなかったから。

その後ろで、玲実が転校初日からみんなに囲まれていた。かわいい子が転校してきたら、そりゃあ、取り囲む。

みんな玲実と喋りたがってそわそわしていたのに、なぜか玲実はその後、ことあるごとに私に話しかけてきた。背中をちよんちよんと指でつついて、目が合うとうふふと笑うのだ。そうしてすこしずつ、言葉を交わすようになった。

それでもやっぱり休み時間になると、私は文乃のクラスに行った。文乃も私と同じように、ひとりでいたから。

玲実はいつもふしぎそうだった。どうして、あの隣のクラスの子としか仲良くしないの？ とはっきり訊かれたこともある。

B わからないんだろうな、と思った。王国を守らねばならない私の気持ちなど。転校してくる前から、いや生まれてこのかた人気者だつたに違いない玲実には。

「なんかめいちゃん、最近、楽しそう」

廊下で並んで喋っている時、ふたつにわけて結んだ髪の毛のひと房を指に巻きつけながら、文乃が言った。

C 「クラスで新しい友だちができた、とか？」

まあ、うん、と答えた、悪いことをしているわけじゃないのに、どうしても文乃の顔が見られなくて、自分の上履きのつまさをヒッシに見ていた。

ちよんちよんその日の朝、玲実に貸した本を返してもらった。短い手紙が挟まっていた。

「すぐおもしろかった。ありがとう。また、おもしろい本教えてね」というきれいな、硬筆のお手本みたいな字を、授業中こっそりと何度も指でなぞった。かわいい子犬の絵がついたピンクの便箋だった。D かわいらしいものをふつうに使える玲実は、まぶしい。

「でも、いちばんの友だちは、文乃やし」

「へえ、じゃあ二番もおるってことやな」

自分の上履きから目がそらせなかった。文乃の足がすつと伸びて視界に割りこんできたと思ったら、私の足にのってきた。痛い、と



**E** をしかめたらさらに強く踏ふまれた。

疎そましい、と思うようになったのは、それがきっかけだったのかもしれない。

たとえば二クラス合同でやる体育や家庭科の授業のたび、文乃は探さぐるような視線を私に向けるようになった。玲実と喋しゃべるたび、眉間まゆげんにぎゅつとしわが寄よる。

三人で遊あそんだらいいんだ。そう思いついて、実行しようとしたこともある。図書室に行こうと誘さそったのだが、文乃は「あの子も一緒いっしょなら、私は行かへん。ふたりで行ったらええやん」と顔を背そむけて帰かえってしまったから、結局玲実と私のふたりで行くことになった。

図書室で玲実が「この本、読んだことある？」と指さしたファンタジー小説のシリーズを、私は文乃に薦すすめられて、全巻②読破よみつぶしていた。すごい、と玲実は両手たてを叩たたいた。作者が、自分の子どもを寝ねかしつける時に即興※そつぎようでつくったお話がもとなってるらしい、という知識を披露ひろうすると、めいちゃんなんでも知ってるんだね、すごいね、とまた褒ほめられた。文乃の受け売り※だった。けれどもそのことは黙だまっていた。

「私、『めい』っていう名前、嫌きらいやねん」と打ち明けたのも、その時だった。図書室には私たちと司書※の先生以外※は誰だれもいなくて、夕陽が傷だらけの床ゆかをマーマレードの色に染めていたことを、なぜだかはつきり覚えてる。

以前、文乃にも、自分の名前が好きじゃないと話したことがあった。文乃は私の悩みなやみを笑い飛ばした。読めないとか意味不明な名前とかそんなのより全然ぜんぜんでしたから、ぜいたくな悩みだと。

③ だからその時玲実が「じゃあ明日からサキって呼よぶね、長崎ながさきのサキ」と提案してくれただけでも、なんとなくまだ一緒にいたイッサツ③つ本を借りて、校門を出た。ほんとうは十字路で私は右に、玲実③は左に曲がるのだけれども、なんとなくまだ一緒にいた

くて玲実の家があるほうに歩いていった。文乃の家も同じ町内にあつたから、そのへんの地理はばっちりだった。

④ ふいに玲実が立ち止まった。視線を辿たどっていくと、犬がいた。どこからか逃にげてきたのか、リードをずるずると引きずっている。カインシの姿は見当たらない。

「犬、苦手なの」

玲実が青ざめているので、びっくりした。ランドセルの肩かたベルトをぎゅつと掴つかんで、立ち尽つくくしている。ちっちゃなかわいらしい小型犬を、ひどくこわがっている。

「子犬の便箋使ってたのに」

「子犬？」

えっ、あれクマじゃないの？ このタイミングでみようにずれたところを發揮する玲実には、思わず笑ってしまった。だから、F 然に手を取ることができた。F ごく自

「よし、逃げよ」

同時に、駆け出した。遊んでもらえなくても思ったのか、犬は舌を出して追いかけてきた。私は何度も振り返って「しっ、しっ」と追っ払ったが、どこまでもついてくる。ランドセルのなかみがやかましく音を立てた。

手をしっかりとつないだまま、走り続けた。後方で、自転車に乗った人が犬の名を呼んだようだった。

犬、もうついてきてへんで。私がそう言っても玲実は走るのをやめなかった。手も離さなかった。だから私も走るしかなかった。

いつのまにか、笑い出していた。笑って、走って、しまいにはお腹が痛くなってきて、歩道にへたりこむようにして止まった。それでもまだ、私たちは笑っていた。

「怖かったけど、なんか途中から楽しくなっちゃった」

楽しい時には楽しいと、言える子だった、玲実は。文乃は、そうではなかった。

〈中略〉

あの日の翌日、文乃と一緒に下校した。下駄箱で待っていた文乃はかたい表情をしていて、話しかけても答ええない。

「昨日、見たよ」

十字路に差しかかった時、ようやく文乃が口を開いた。私たちは、同時に立ち止まった。キヤーキヤーはしゃぎながら走ったけど、と文乃は唇を歪めた。

「走ってたけど、それがなに」

文乃は顎を上げて「開き直るんだ？」と小石を蹴っている私を睨んだ。なんでこんな、責められてるみたいな状況になっっているんだろう。文乃を仲間外れにして玲実と一緒にいたわけじゃないのに。

「ねえ、めいちゃん、なんか勘違いしてるんちゃう？」

文乃が、フンと笑う。

「あの子がさ、本気でめいちゃんと仲良くしたがってると思う?」

あの子、たぶんいつも自分がいちばんでいたいタイプやで。自分よりかわいくない子とかできない子を傍そばにおいて、引き立て役にするつもりなんや。それなのにはしゃいで、みっともないで、と文乃は言い募もった。

「違うよ、玲実ちゃんはそんな子やない」

「そんな子やない?」

外国人みたいに大仰※おおびょうに肩をすくめる文乃の仕草を見たのははじめてではなかったが、なぜ今まではなんとも思わなかったのだろう、とふしぎになるほど憎にくたらしく見えた。

外国人じゃないのに外国人みたいな動作をする文乃は、滑稽こっけいでもあった。

「私はあの子をよくわかってますってこと?」

うける、と文乃は口に手を当てた。ひとしきり笑ってから「ねえ、めいちゃん。あの子とめいちゃんは同じ色では塗ぬられへんのやで。ぜんぜんタイプ違う」と諭さとすような口調になった。

めいちゃんはな、とまた何か言いかけた文乃の言葉を、私は遮さかんった。

「もういい。わかった」

同じ色で塗れない。 **G** 反論したいのに、言葉が出なかった。

文乃に背を向けて走り出した。家に着くまで、一度も立ち止まらなかった。

二階の自分の部屋に入って、ランドセルを床たに叩たたきつけた。

同じ色で塗れない。そんなことはわかっている。玲実と一緒にいても引き立て役にしかならないことぐらい知ってる。でもそれをなんで文乃から言われなければいけないのか。

嫌きらいだ、と思った。声に出して言いもした。文乃なんか大嫌いや。もうずいぶん前からそう思っていたような気がした。もうあの子となんか、二度と喋りたくない。

〈寺地はるな「消滅した王国」(ポプラ社『夜が暗いとはかぎらない』所収)より〉

〔語注〕

- ※ めいちゃん……………「私」の本名は「長崎<sup>ながさき</sup>めい」という。
- ※ 疎<sup>うと</sup>ましい……………いやな感じがして遠ざけたいこと。
- ※ 眉<sup>みげん</sup>間……………まゆとまゆの間。
- ※ 即<sup>そく</sup>興……………準備無しにその場で考えたもの。
- ※ 受け売り……………他人の意見や考えを、あたかも自分の考えであるかのように言うこと。
- ※ 司書の先生……………学校の図書館の管理をしている先生。
- ※ 大<sup>おお</sup>仰……………おおげさなこと。

問一

- ① ヒツシ
  - ② 読破
  - ③ イツサツ
  - ④ カイヌシ
- のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二

A 王国にこもっていた私には、文乃の他に友だちがいなかったから。・ わからないんだろうな、と思った。王国を守らねばならぬ私の気持ちなど。とありますが、「めい」ととって「王国」とは何を指しているのですか。答えとしてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 自分の苦手なことや嫌なことを乗り越えることのできた、自立した世界。
- イ 自分とは違う存在がいることを認めて、受け入れる、おおらかな世界。
- ウ 「文乃」の言う通りにふるまうことしかできない、きゅうくつな世界。
- エ 他者との関わりをさけて自分自身を守るための、閉ざされた世界。
- オ 周りの友達みんなが仲良く過ごせるように気づかう、平和な世界。







